

〔研究論文〕

「女性の経験」と知識の社会的組織化
－ドロシー・スミスのIEと『82年生まれ、キム・ジヨン』の接点(2)－

上谷 香陽

〔Article〕

**‘Women’s Experience’ and Social Organization of Knowledge:
Reading *Kim Ji Young Born 1982* from Perspective of Dorothy Smith’s IE.(2)**

Kayo UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to read a Korean novel *Kim Ji Young Born 1982* from the perspective of Dorothy Smith’s IE (Institutional Ethnography). This paper argues that this novel describes the same kind of ‘women’s experience’ as women’s movement in North America has questioned since late 1960’s. Based on Smith’s article about ‘women and mental illness’, this paper examines how institutional discourse rules and regulates ordinary way of knowing through the social organization of knowledge in institutional process.

In her book *The Conceptual Practices of Power*, Smith explicated how ideological methods of reading and writing texts operated in psychiatric institutional process. In anatomizing the way of writing a psychiatric case history, she demonstrated that in the institutional process of producing an ‘appropriate’ psychiatric factual accounts, primary narrative of people’s experience was reassembled by the interpretive schema of psychiatric discourse and displaced by ideological narrative. Ideological practices in constructing and interpreting factual accounts subsume what people know from their actual experience as a case or an instance of the universalized concept of the psychiatric discourse. Based on a case record which has been written to produce the case history, Smith tried to recover the patient’s primary narrative of experience and suggest alternative way of knowing about what has happened.

Inspired by the women’s movement in North America, Smith critically reconsidered the way of constructing the ‘women’s experience’ which has been taken as illogical and often treated as mental illness by psychiatric factual account. She explicated that such ‘experience’ was produced through social organization of knowledge in institutional process, where institutional discourse operated to exclude what women know from within their everyday and everynight actualities.

Following Smith’s sociology, this paper considers the way of making a sociological description which makes use of the language of everyday life as the basis for investigating the social and explores how everyday world of people’s experience is put together by social relations that extend beyond the everyday world.

1. はじめに

本論では前稿⁽¹⁾に引き続きカナダの社会学者ドロシー・スミスの議論に依拠しながら、小説『82年生まれ、キム・ジョン』で描かれている韓国の「女性の経験」と、1960年代末の北米における女性運動において提起された「女性の経験」との接点について、社会学的な考察を行う。

前稿では、この小説が精神科の診療記録という形式で構成されていることの意味に着目して論じてきた。スミスのInstitutional Ethnography(以下IE)において、精神科の診療とは、具体的・個別的・特殊的・主観的とみなされてきた日常の言葉(日常的知識)による「知り方」と、抽象的・一般的・普遍的・客観的とみなされてきた思考の言葉(専門的知識)による「知り方」が交わるinstitution⁽²⁾の場面の一つとして捉えらえる。二つの「知り方」の接続点(juncture)で、家庭という局所的な相互行為場面で起こった「不可解な出来事」は「精神医学的概念」に置き換えられ、「起こったこと」は「患者」となった当人の「病気」の問題として取り扱われていく。その過程において、「起こったこと」がそれに関わる家庭内外の複数の他者たちとの行為の連係において生じている可能性は、不問に付されていく。社会的な知識産出の場面において、二つの「知り方」の間には非対称性が存在する。日常的知識による「知り方」は専門的知識による「知り方」の基盤となるが、前者は後者に包摂されうるものとして扱われ、通常は表に出てこない。日常の言葉において知られたことは思考の言葉に置き換えられ、そもそも二つの「知り方」の間に「断絶」があること自体が不可視にされていくのである。

スミスのIEが着目するのは、上記のような言語使用実践⁽³⁾が、諸機関における日々のルーティン・ワークの遂行やそれらのワークの連係に、不可欠な構成要素として埋め込まれていることである。近代社会的な「女性」観に対する疑義が北米において長らく不可視にされてきた社会的メカニズムを解明するにあたって、スミスは、精神医学の諸機関におけるこの記録つけのワークの果たしてきた役割に注目する。前稿に引き続き本稿では、この点についてさらなる考察を行いたい。

2. プライマリー・ナラティブに依拠したイデオロギー的・ナラティブの解剖

2-1 プライマリー・ナラティブの解釈手続き

ここで取り上げるスミス論考(Smith 1990a:165-173:初出は1983年)では、精神医学のケース・ヒストリー⁽⁴⁾という「テキスト」と、その基となった記録との関係が題材になっている。スミスはここで、ある「ケース」に関わる3つの異なる種類の記述を取り上げ、その相互関係を解明している。最初の記述は、公式の臨床のプレゼンテーションのために精神医学のレジデントによって用意されたケース・ヒストリーからの抜粋である⁽⁵⁾。この「テキスト」は、入院時の面談(admission interviews)、診断時の面談(diagnostic interviews)、病棟での記録、親戚との面談、処方され与えられた治療からの諸記録の、ゆるやかな組立て・寄せ集め(assemblage)で成り立つケース・レコードを基に作成されていた。ケース・レコードは、元々はプライマリー・ナラティブ⁽⁶⁾から生じているが、記録される時点で精神医学の諸スキーマが意図する形式に部分的に仕立てられていた⁽⁷⁾。

このケース・ヒストリーに記されている詳細事項をどのような解釈スキーマによって読むべきかは、「テキスト」の見出しによって示唆されている。しかし、各事項を一貫した物語へとつなぎ合わせる接続物(connectives)は明示されていない。したがって、箇条書きされた物語の寄せ集め(assemblage)としてのこのケース・ヒストリーは—もしそれが適切な「テキスト」としてinstitutionの過程を流通しうるとするならば—それ自体においては利用可能ではない言説のスキーマによって

秩序づけられる必要がある。ケース・ヒストリーからの抜粋の後には、ケース・ヒストリーには含まれていない他の素材を加えた、スミスによるこのケースについての2番目の記述が続く。2番目の記述は、ケース・ヒストリーを準備する中で精神医学のレジデントによって作成された、ケース・レコードからのメモに基づいている。ケース・ヒストリーにおいては利用可能ではない追加の素材が提供されることで、この「テキスト」作成の過程でプライマリー・ナラティブに対して作動したであろう選択と組立の手続きの操作を、より明確に認識することが可能になる。

この手続きは、3番目の記述で抜粋されるような、精神医学の教科書における言説によって提供されるものである。言説⁽⁸⁾のスキーマは、「テキスト(ケース・ヒストリー)」を書くことにおいて、プライマリー・ナラティブから何をどのように選択するかを指示するとともに、「テキスト」を読むことにおいて、列挙されたそれぞれの詳細事項をどのように接続するかを指示するように作動すると考えられるのである。

記述1

出生要因を含む、繰り返す精神医学的障害の事例

最初の入院の病歴。患者の経過とその後の入院についての記述が続く。ハリエットは最初の子どもを1970年に出産した。妊娠と産後の経過は、合併症もなく、患者によれば人生の幸せな期間だったと述べられている。

1976年に2番目の子どもの妊娠4ヶ月になるまで、患者は気分がよかった。彼女は「神はこの不自然な受精のために肢体不自由な子どもの出生で私を罰しようとしている」と心配して夜眠らずに起きているようになった。

これより8ヶ月前、ハリエットと夫は不妊のための検査を受けており、夫の精子を使った人工受精が最終的に行われた。その後まもなく、ハリエットは妊娠した。

1976年6月に男の子が生まれた。ハリエットは、3ヶ月間、乳児を母乳で育てていた。赤ちゃんの体重が増えないことを懸念した小児科医が、人工ミルクで育てることを勧めるまでは、患者はこのことに腹を立てた。というのも、「良い母親になるということは、母乳で8ヶ月間育てることを意味する」からだ。

人工ミルクで育てることに切り変えた後、ハリエットは悪夢を見るようになった。そして彼女の夫は、ハリエットが、乳児に無理に乳をやろうとしたり、子どもの幸福についてしつこく心配したりすることで、ますます疲れ果てていっていることに気がついた。(Smith 1990a:166)

この抜粋に書かれていることは、前稿で取り上げたDiane Harpwoodの小説の記述を想起させる。ある主婦が彼女の夫に対して怒りが爆発したことや、不公平な家事ワークの分業に直面したフラストレーションや疲労困憊における怒りの根拠の記述である。精神科医とのセッションの過程で切れ切れに話されたハリエットのストーリー、彼女のプライマリー・ナラティブは、そのようなものだったかもしれないと推測される。しかしハリエットのケース・ヒストリーの元となった、ケース・レコードにはそれ以上のことが含まれていた可能性があるとしてスミスは指摘する。公式の「テキスト」としてのこのケース・ヒストリーにおいては不可視にされているが、看護師の観察、おそらくソーシャルワーカーによる家族との面談、可能性としては精神科医自身による夫との面談などが、そこにあったはずなのである。

スミスはここで、ケース・ヒストリーを準備する中で精神医学のレジデントによって作成された

ケース・レコードからのメモを基に、精神医学の諸機関における「テキスト」作成のワークを明らかにしようとする。それは、ハリエットの葬り去られた物語に対して行われたであろうワークである。スミスは、ケース・ヒストリーに基づいて、以下のような単純なプライマリー・ナラティブを組み立てた。続く議論において参照しやすいように、段落ごとに番号がつけられている。

記述 2

1. ハリエットと彼女の夫は、不妊のための検査を受けた。ハリエットは人工的に受精させられた。そして妊娠した。
2. 妊娠の最初の2ヶ月は非常に困難だった。ハリエットは大半の期間、吐き気におそわれていた。赤ちゃんを失うのではないかと思われた。彼女は薬を服用することになった。
3. 4ヶ月目までに、彼女は、何かがとてもおかしいと感じ始めた。彼女は「神はこの不自然な受精のために肢体不自由な子どもの出生で私を罰しようとしている」と心配して夜眠らずに起きていた。
4. 赤ちゃんは出産予定日に生まれた。しかし生まれた時からうじて5ポンドを超える重さだった。
5. 赤ちゃんは気難しかった。彼はたくさん泣いて、夜眠らず、体重が増えるのがとても遅かった。
6. 3ヶ月目に、ハリエットの小児科医は赤ちゃんの体重増加が遅いことで不安になり、ハリエットに母乳で育てるのをやめ、赤ちゃんに人工ミルク(formula)を始めさせるよう提案した。
7. ハリエットはとても怒った。彼女は、母乳で育てることはとても重要だし、良い母親は8ヶ月になるまで母乳で育てるものだと感じていた。(Smith 1990a:167)

レジデントのケース・ヒストリーと、記述2で示されたスミスによる仮想プライマリー・ナラティブは、記述の順番と選択において異なっている。ケース・ヒストリーは、後続することを「病気」についてのナラティブとして読むための、一般的な指示から始まる。2番目の段落には、病気の「徴候」の最初の出現が選ばれる。2番目の子供の妊娠の4ヶ月目において、ハリエットは健康から病気へ移行したのである。病気は、人工授精という「不信心」についての心配として現れてくる。ケース・ヒストリーにおける順番づけの手続きは、「不自然な受精」というハリエットの言葉によって言及される人工授精の実施を、経験的順番における論理的場所から置き換える。人工授精に言及する段落は、病気の物語の一部分というよりは、ハリエットの心配の事実確認のための迂回—彼女は実際人工授精を受けたのだ、ということを確認する—として挿入されている。これに対して、スミスによる仮想プライマリー・ナラティブにおいて人工授精に言及する段落は、経験の順番に一致するように、順番の始まりで現れる。

スミスの物語は、レジデントのケース・ヒストリーにおいては欠けている情報も紹介する。それは、妊娠中のハリエットの具合が悪さ(そのために、彼女は薬を与えられたのだ)への言及、生まれた時の赤ちゃんの小ささへの言及、生まれた最初の数ヶ月における彼の「気難し」さへの言及である。スミスはそれらを、ケース・レコードに基づくレジデントのメモの中から抜き出した。したがってこれらの情報は、ケース・ヒストリーにも存在しえたものである。ケース・ヒストリーからこれらを除外することは、ハリエットの心配を病気の症状として読むことを準備する。局所的な理由(occasion)を奪われることによって、子どもについてのハリエットの心配は、どこから来たのか分からないように見え、根拠を持たないように見えるのである。

スミスはレジデントのメモの中に、ハリエットの行動を生じさせる理由として読まれうる記述を

作るための素材を見出した。それは、彼女の行動を、「病気」という枠組から出し、プライマリー・ナラティブ形式の局所的に動機づけられた接続に戻すための素材である。ケース・ヒストリーにそれらの記述が存在しないことで、ハリエットの心配は文脈を欠き、意味をなさないものになる。それゆえ彼女の心配は、精神医学のスキーマによって解釈されるべき「症状」として利用可能になるのである。しかし、もしハリエットの行動を生じさせる理由として読まれうる記述が含まれていたならば、別の言語実践活動が優勢になりえた可能性があるとしてスミスは指摘する。実際の妊娠や出産をめぐる、読み手自身の日常のワーキング・ノレッジ(working knowledge)に依拠し、局所的な行為の文脈においてものごとを検討する方法を用いながらハリエットの経験を理解する、という読みが開かれた可能性である。

プライマリー・ナラティブを読むことに含まれる解釈ワークの特徴的な手続きとして、スミスは、「記述を読む際に、読み手が、『誰もが知っていること』の範囲で手に入る資源を利用する権利を与えられていると感じられる」という点に着目する。理由づけ(occasioning)は、個人の行動を経験の文脈に状況づける解釈手続きであり、プライマリー・ナラティブに特有のものである。理由づけは、当該物語に特有の文脈を選び、組み立て、組織化する。それは、読者がコモンセンス・ノレッジ(common sense knowledge)とみなすものと呼び出す手続きであるとスミスは言う。この手続きを使用することで、ハリエットの行動は、彼女の生きられた状況から生じた結果として、筋道を立てて理解できるようになる可能性がある。

2-2 イデオロギー的ナラティブの解釈手続き

他方、理由づけの記述の不在において、ケース・ヒストリーには接続の脱臼がある。ハリエットの心配は、動機がないようにみえる。彼女の恐れは、彼女の生活や経験との理解可能な接続なしに生じている。ケース・ヒストリーにおける接続物の不在、経験の文脈に状況づけられた推論を可能にする接続物として読み手によって利用可能な理由(occasions)の不在は、以下のような効果を持つ。(a)ケース・ヒストリーから文脈的な指示を奪うことによって、そしてケース・ヒストリーを首尾一貫しない状態にさせることによって、この記述を精神病行動として読むことに備える。(b)病気の「症状」としてケース・ヒストリーを読むことに備える。(c)精神医学の言説の保証された接続物の挿入を許可し、それに備える(Smith 1990a: 169)。

スミスの提示する3番目の記述は、「妊娠や出産と関連づけられた感情障害(affective disorder)」のタイプについての教科書の説明だ。「出生要因」に言及しているケース・ヒストリーのタイトルは、この抜粋のような精神医学の言説における解釈スキーマに依拠していると考えられる。

これらの期間のいずれかに関連する特定の精神異常は…存在しない。生理的恒常性を維持することのストレスや感情的に重大な状況のストレスの下では、潜在的で抑圧された心理学的素材が、精神病理学的反応を起こす患者のエゴの供給源にとって非常に大きいことがわかる。妊娠が母親に無意識的に意味することは、子どもの誕生と同様に重要である。疑いなく、このことは、自分の母親に対する患者の昔の態度を生き返らせ、身体的な危害や傷害の昔のコンプレックスをよみがえさせるだろう。時に患者は、例えば結婚生活や母性(motherhood)についての葛藤を回想しながら、夫か子どもに対する敵意を示唆する妄想を表現する。子どもの拒絶は、子どもが死ぬという妄想や、子どもへの虐待的な扱いや、子どもに何かが起こるのではないかという不安によって表現されるだろう((L. C. Kolb 1977: 180)引用は(Smith 1990a: 169))。

上のような精神医学の言説における解釈スキーマを根底のパターンとして利用することで、ケース・ヒストリーの詳細事項をそのパターンの記録や指標として扱い、各事項の接続の論理を見出すことが可能になる。スミスは、記述2の仮想プライマリー・ナラティブを用い、この教科書の説明を適用して、「テキスト」作成のワークを再現することを試みる。ここで記述2の仮想プライマリー・ナラティブは、ケース・ヒストリーにおける詳細事項の集まりを作る素材として扱われる。精神医学の言説の解釈スキーマは、それが意図するケース・ヒストリーを生み出すために、仮想プライマリー・ナラティブの素材にどのように作用するのか。スミスはその手続きを、以下のような一組の指示のセットとして翻訳することを試みる。

1. 教科書の医学的記述を使い、患者についての情報の少なくとも一つのアイテムをその記述の「証拠」として選び出した文章を、仮想プライマリー・ナラティブから分離しなさい。この文章は「子どもの拒絶は、子どもが死ぬという妄想や、子どもへの虐待的な扱いや、子どもに何かが起こるのではないかという不安によって表現されるだろう」を満たす。この文章は、「子どもの拒絶」というスキーマの証拠として解釈されうるある種の行動のモデルを提供する。すなわち、子どもが死ぬという妄想や、子どもへの虐待的な扱いや、子どもに何かが起こるのではないかという不安である。
2. 仮想プライマリー・ナラティブを見直して、そのようにカテゴリー化されうる文(あるいは複数の文)を見つけなさい。「彼女は夜眠らずに『神はこの不自然な受精のために肢体不自由な子どもの出生で私を罰しようとしている』と心配するようになった」という3段落目の文は、よい候補だ。
3. その文を教科書の説明に埋め込まれた理論との関係で再解釈しなさい。理論は、恐れを拒絶に変換する。そしてこの文は「子どもの拒絶」を記録する一つの詳細事項として機能する。
4. 選び出された詳細事項に理由(occasions)を提供する情報を省略しなさい。「難しい妊娠による具合の悪さ」というプライマリー・ナラティブの接続物は、まだ生まれていない子どもに何か深刻な悪いことが起こるのではないかというハリエットの恐れを、そうした情報と結びつける。この接続物は、人工授精という経験の理解可能な文脈を作るだろう。だからこれらは処分しなければならない。プライマリー・ナラティブの2段落目を省略しなさい(Smith 1990a:170)。

これらの手続きは、ケース・ヒストリーの詳細事項を生産するとともに、スキーマへの接続物が選び出されるやり方や、ケース・ヒストリーが「出生要因を含む、繰り返す精神医学的障害」の例として解釈されうるやり方を可視化する。ケース・ヒストリーを読んだり聞いたりしようとする時にはすでに、精神医学の解釈スキーマとその適用のやり方を知る人々が詳細事項との接続を読むことができるようになっているのである。このスキーマを使って仮想プライマリー・ナラティブから1、3、6、7段落を選び出し、レジデントのメモから関連する素材を付け加えることで、以下のような完全に「精神医学化された」物語が語りうるようになる。

ハリエットと彼女自身の母親との関係は、非常に不満足なものであった。彼女は愛されておらず、拒絶されていると感じていた。母親は、ハリエットに暖かさを全く示さなかった。ハリエット自身が母親になった時、古い葛藤が表面化した。母親としての役割を彼女が拒絶することは、

母親からの愛が十分に満たされていないことから生じた。母親としての自分自身の役割を拒絶することは、子どもへの敵意において表現された。その敵意は子どもが肢体不自由で生まれてくるかもしれないという恐れとして現れ、後にはその子の幸福についての執拗な懸念において現れている。それはまた、母親として自分が不適格だという非合理的な不安においても現れていた(Smith 1990a:170-171)。

この物語は、詳細事項とスキーマを結合する。読み手が精神医学の言説に習熟し、ケース・ヒストリーの詳細事項をこのスキーマで解釈できる能力が高いほど、大変うまくそれらは結合されるのである。

「理由(occasions)」の抑圧と、彼女の根拠(reasons)としての推論的接続物(connectives)の切り離しによって、記された詳細事項は、精神医学の言説から引き出されたイデオロギー的接続物の挿入に対して開かれる。ハリエットの恐れを理由づけ意味あるものにする情報を捨て去ることは、その文を「子どもの拒絶」というカテゴリーの例として、したがって「妊娠や出産と関連づけられた感情障害」症候群の記録(あるいは指標)として扱うことを可能にさせる。「子どもの拒絶」は今や、彼女の恐れのも機として挿入される。その根拠が、彼女の根拠に置き換えられたのだ。「テキスト」において、主体としてのハリエットの能力は制圧されていくのである。

イデオロギー的手続きは、「テキスト」作成のワークにおいて、専門的言説における解釈スキーマを意図しながら、プライマリー・ナラティブから一連の詳細事項を選び出す。選択と組立ての手続きは、競合する理由(経験の文脈に状況づけられた理由)を捨て去り、イデオロギー的接続物の挿入を許す。詳細事項を選び出し組立てる過程は、「このスキーマはこれに当てはまるか?」「これはこのスキーマによって記述可能(describable)で解釈可能か?」という基準によって、ある配置を創出する。結果として出てくる事実報告は完全に正確かもしれないが、各々の文を順番に並べる文法、論理、接続物を提供する手続きは、オリジナルな出来事の連鎖によってというよりは、言説において生み出されるスキーマによって提供されることになる。プライマリー・ナラティブがイデオロギー的ナラティブに組み立て直され、包摂され、置き換えられる過程において、当該出来事を実際に経験した主体の声は捨て去られ、「テキスト」における客観化されたヴァージョンが権威ある声として就任することになるのである。

3. 言説、イデオロギー・コード、ワーク・ノレッジ

3-1 institutionの過程における「テキスト的現実」の産出

北米において、教育や医療や行政や経営や法律や学問などに関わる諸組織や諸機関や諸施設は、人々の日々の生活をサポートすると同時に一定のやり方で規制(regulate)するように機能し、私たちの日常生活世界に深く関与している。これらの諸機関はまた、「実際に起こったこと」の公的な記述・記録・報告としての様々な「テキスト」作成によって、「共通に知られた世界」についての客観化された知識を産出する。公式の事実報告(factual account)⁽⁹⁾としての「テキスト的現実」は、直接知られることを超えた世界についての今日の私たちの社会意識の基盤となっている。

スミスのIEにおいてinstitutionsとは、単に実体的な組織としてのみならず、専門的言説を媒介に組織内(間)の複数の人々の行為が連鎖し配置される諸関係の、交差点や連係として捉えられている。本稿で論じてきたように、専門的な知識や概念を使用する実践活動は、専門書や学術論文を

書いたり読んだりそれについて話したりすることのみならず、諸機関における日々のルーティン・ワークの遂行や、それらのワークの係に不可欠な構成要素として埋め込まれている。中でも、「実際に起こったこと」の公的な記述・記録・報告としての「テキスト」作成は、組織や機関や施設が日々のルーティン・ワークを遂行する際の基盤であり、人々が諸機関と接触する際に必ず行われる実務である。

諸組織や諸機関や諸施設において異なる時間、異なる空間で実際に日々の実務に関わる人々の多様なワークは、「テキスト」を媒介にして相互に連係(coordinated)されている。診察における医師と患者のやりとりには、後続する一連の行為—診断、治療法の決定、薬の処方など—が存在する。「患者」に何が起こったのかを記録した「テキスト」は、それらの諸行為を連係しinstitutionの過程を実際に動かしていく媒介として働く。前節のスミスの議論では、人々が自らの経験を回想しながら語ったことがら、精神医学の機関における記録つけの段階ですでに、医学的理由を与えられるべき「病気」の事例として精神医学の知識や概念に包摂されていく過程が解明された。各々の文が精神医学の解釈スキーマによって与えられる文法、論理、接続物の使用をとおして配置される過程で、プライマリー・ナラティブでは語られていたハリエットの「心配」や「恐れ」や「怒り」を理由づけ意味あるものにする情報は、公式の記録から除外されていったのである。

前節のスミスの議論からはまた、個人の行動を経験の文脈に状況づける理由づけ(occasioning)の抑圧は、単に精神医学の知識や概念だけで成し遂げられてきたわけではないことも示唆される。各専門分野ごとに独立しているように見える複数のinstitutionの言説それ自体が、スミスがイデオロギー・コードと呼ぶような、人々の日々の生活の様々な局面で場面横断的に作用する一つの認識の枠型によって制御されている可能性である。「ケース・ヒストリー」に記録されたハリエットの子どもへの心配が、「子どもの拒絶」に起因する「妊娠や出産と関連づけられた感情障害(affective disorder)」の症状と結びつきうるのは、なぜそれが二人目の子どもの妊娠4ヶ月目に生じたのか、なぜそれは無事出産した後も続いているのかを理解可能にする筋道が欠落しているからである。この「テキスト」を作成するために取ったメモの中には存在した、妊娠中のハリエットの具合の悪さ(そのために、彼女は薬を与えられた)への言及、生まれた時の赤ちゃんの小ささへの言及、生まれた最初の数ヶ月における彼の「気難し」さへの言及が、公式の記録からは除外されている。そのような除外は、精神医学の専門的な言説のみによって可能になったというよりは、1970年代当時北米で自明視されていた「女性観」「母親観」「夫婦観」「家族観」—スミスがSNAF(Standard North American Family: 標準的な北米の家族)と呼ぶようなイデオロギー・コード(Smith 1999:157-171)—が同時に作用していた可能性が示唆される。イデオロギー・コードとしてのSNAFとは、必ずしも、家族についての一定の概念体系やその内容それ自体を指すのではない。それはむしろ、institutionの過程において「テキスト」を書いたりトークを生み出したりする中で構文やカテゴリーや語彙を選択するための手続きや、文章を解釈するための手続きを、休み無く発生させる枠型として作動する⁽¹⁰⁾。認識の枠型としてのイデオロギー・コードは、これに合致しない個人の行動や感情に対して、暗黙のうちに「例外」「逸脱」「まっとうではない」「正常ではない」などの評価を与え、別の解釈の可能性を封じ込めていくように作動するのである。

仮に、妊娠出産が生物学的出来事としてのみ捉えられているならば、女性たちがこの出来事を様々な社会的文脈において複数の他者との相互行為の中で経験しているということは不問に付されることになるだろう。「自然な妊娠」「母乳での子育て」「子どもの健康」をめぐるハリエットの行動や感情も、元々はそのような社会的文脈の中に埋め込まれていたはずである。しかし例えば、「一

連の出来事に夫はどのように関わってきたのか」などということからは、精神医学の言説においても、SNAPというイデオロギー・コードにおいても関連のないものとみなされ、記録からは除外されていった可能性があるのである。

前節で取り上げたスミスの論考は、欧米近代社会における「まっとうな女性」のあり方への疑義や矛盾の抑圧をめぐって精神医学の諸機関が果たしてきた「役割」について、当時アカデミックな領域の内外で起こった批判的な再検討の諸議論をふまえている。ただしそのような諸議論をふまえずスミスが見出した社会学的探究の論点は、取り上げられた事例における精神医学的ケアが不適切だったということよりは、むしろ、適切な精神医学的ケアが遂行されたとしても解決されない別の種類の問題が発見可能になったやり方である。この点をふまেসミスの社会学は、institutionの過程において産出される公式の事実報告としての「テキスト的現実」から出発するのは別のやり方で、直接知られることを超えた世界についての知識を生み出す社会学的記述を模索していくのである。

3-2 ワーク・ノレッジを出発点にした institution の過程の解明

学問分野としての社会学もまた、公式の事実報告としての「テキスト的現実」を生み出すとともに、それに依拠して専門的な社会学的知識を産出する institution の過程に埋め込まれてきた。専門的社会学概念は、個人の見たり聞いたり経験したりすることを「社会的なこと」として理解するためのものの見方を示す、思考の言葉の一つである。私たちはこの思考の言葉を使って、自分の身に起こっていることが自分だけの問題で完結しないこと、自分の身に起こっていることが他者の身に起こっていることと関係していること、自分と他者の間には共通の利害関心が見い出せること、自分の行っていることや考えていることを一定のやり方で方向づける何らかの仕組があることなど、自分の日々の生活について日常の言葉を使っては知り得なかった新たな側面を「発見」できる可能性がある。

北米では女性運動以降の50年間で、従来私的領域に閉じ込められてきた「パーソナルな問題」を「社会の問題」として捉え直す新たなものの見方が institution の言説に組み込まれ、組織や機関や施設の動かし方を変え、人々の日々の生活をサポートする別のやり方が開発されてきた。

女性運動の経験が、その発端において、この運動が闘っていた男性主義の体制の中で生き、考えてきた私たちにとって、いかにラディカルだったかを思い出すのは難しい。私たちにとって、この闘いは、外側の敵としてのあの体制との闘いであったとともに、私たちの内側の闘い、いかに行き、考え、感じるかについて私たちが知っていることとの闘いだった。実際私たち自身が、消極的であっても、あの体制に参加してきたのだった。もともと日常生活の経験として話された経験が公的な言語に翻訳され、女性運動にとって弁別的な(特有の)やり方で政治的になるような、開発された言説がなかったのだ。私たちは他の女性たちと話すことの中で、自分たちがした経験について、自分たちがしなかった経験について学んだ。私たちは「抑圧」「レイプ」「ハラセメント」「セクシズム」「暴力」などを名付け始めた。これらは、名前以上のことをなした用語だった。これらの用語は、分け持たれた経験に政治的存在を与えたのである (Smith 2005:7)。

北米ではまた、1980年代に、アカデミックな領域における女性学(women's studies)の制度化が進んだ。この文脈において、スミスが1970年代から「女性のための社会学」として模索してきた社会

学的探究の再評価が進み、彼女の「Institutional Ethnography」は北米の社会学の系譜に正当に位置づけられるようになってきているのである⁽¹¹⁾。

しかしながらこのことは、前述したスミスの社会学的探究の中心的論点が変わったということの意味するわけではない。スミスのIEは、無限に多様な生きられたアクチュアリティにおける具体的、個別的、特殊的、主観的な人々の経験を包摂するような、抽象的、一般的、普遍的、客観的な専門的知識を産出することを最終目的としているわけではない。あるいは、新たな「社会問題」を同定可能にする実体的な概念や知識を創出し、既存のinstitutionの言説に組み入れることそれ自体が目指されているわけでもない。むしろスミスのIEの目的は、人々が自らの生活の局所的なアクチュアリティについての日常の知識の延長として取り上げられるような、「社会的なこと(the social)」の知識を生み出すことにある。

IEが生み出す知識は、徹頭徹尾、人々の経験の局所的な場に対して文脈依存적であるべきだとスミスは言う。IEは、一つの局所的場面と別の場面を結びつける社会関係⁽¹²⁾の地図を作成しながら、生活の局所的な場面から見えてくるものの範囲を広げることを目指していると言うのである(Smith 2005:29)。

スミスの社会学は直接知られることを超えた世界についての知識を、専門的言説における「テキスト的現実」に依拠しそれを出発点にするのではなく、institutionの過程の社会的組織化に関わる人々のワークとワーク内在的に知り得たこと(work knowledge: ワーク・ノレッジ)に依拠しそれを出発点にして生み出そうとする。ここでワークとは、「時間と労力をかけ、行うつもりがあり、限定された条件のもとで行われ、何であれ手段や道具を用い、人々がそれについて考えなければならぬだろう、人々によって行われている全てのこと(Smith 2005:151-2)」である。ワーク・ノレッジとは、人々が自分のワークについて／の中で知っていることや、人々のワークが他者のワークと連係されるやり方の知識を指す。スミスの言うワークとは、仕事(job)で行われていること以上のことを意味し、何らかの努力を必要とし、人々がそれをやることに意味が付与され、何らかの獲得された能力を含むような、人々が行うこと全てに拡張されている。「テキスト的現実」はそれを書いたり読んだりする活動と不可分なものとして捉え直され、それ自体、institutionの過程における人々のワークの解明の一環として探究可能であるとされるのである⁽¹³⁾。

ワークの概念を拡張することによってスミスは、institutionの過程を実際に遂行する人々の活動全体を、IEの社会学的探究の俎上にのせようとする。ここには、institutionの過程の作動にとって不可欠だが「テキスト」には直接記述されてこなかった様々な活動も含まれる。「テキスト」に記述されてこなかったワークの諸側面―「テキスト」を書いたり読んだりするワークそれ自体も含まれる―は、それらが認識されていようといまいと、それらがinstitutionの過程の目的に関連して肯定的(あるいは実用的)だと見なされていようといまいと、institutionの過程の作動にとって不可欠な構成要素になっている可能性があるのである。

人々が自分のワークについて／の中で知っていることや、人々のワークが他者のワークと連係されるやり方の知識としてのワーク・ノレッジは、イデオロギー的ナラティブの形式ではなくプライマリー・ナラティブの形式の記述において可視化されうる知識のあり方である。自分が日々ルーティンとして行っていることについての自らの経験に基づく知識は、人々が自分の日常生活の専門家として語りうることがらであり、語り手がどう考え、いかに計画し、いかに感じたかといったことがらが含まれる。ワークやワーク・ノレッジという概念によってスミスは、人々が実際に何を行なっているのか、かれらの活動がいかにして組織化されているのか、それについてかれらはいか

に感じているのかに関して人々の経験から学ぶよう、IEに依拠して社会学的探究を行う者を方向づけるのである(Smith 2005:145-164)。

前節で取り上げた論考でスミスは、精神科の「ケース・ヒストリー」という「テキスト」を書いたり読んだりするワークおよびワーク・ノレッジの解明をとおして、もし「ケース・ヒストリー」の中にハリエットの行動や感情を生じさせる理由として読まれうる記述が含まれていたならば、別の言語実践活動が優勢になりえた可能性があることを示唆した。実際の妊娠や出産をめぐる、読み手自身の日常のワーキング・ノレッジ(working knowledge)に依拠し、局所的な行為の文脈においてものごとを検討する方法を用いながらハリエットの経験を理解する、という読みが開かれた可能性である。プライマリー・ナラティブを読むことに含まれる解釈ワークの特徴的な手続きを利用して、読み手が、「誰もが知っていること」の範囲で手に入る資源—コモンセンス・ノレッジ(common sense knowledge)—を呼び出し、この物語に特有の文脈を選び、組み立て、組織化するならば、ハリエットの行動は、彼女の生きられた状況から生じた結果として、筋道を立てて理解できた可能性が示唆されるのである。

ここで言われる「コモンセンス・ノレッジ」「ワーキング・ノレッジ」とほぼ同義に用いられているワーク・ノレッジとは、当該ワークに習熟することで獲得される文脈依存的な知識である。したがって、ここで言われる common sense knowledge は「ありふれた知識」かもしれないが、必ずしも「共通する知識」であるとは限らない。プライマリー・ナラティブにおいても、聞き手(読み手)が、節と節のつながりの欠落を埋めることができない場合がある。スミスの提示した仮想プライマリー・ナラティブから、1970年代の北米を生きている人々の行動や感情の理由を生じさせた社会的文脈を理解することは、そもそも今日の非英語圏の読者には必ずしも容易ではないかもしれない。IEの社会学的探究において、ワーク・ノレッジに依拠しそれを出発点にするということは、専門的知識を日常的知識に一対一対応的に置き換えることを意味するわけではない。あるいはまた、誰もが理解可能な共通認識が存在すると想定されているわけでもない。ここで問われているのは、そもそも、元々の局所的な行為の文脈を精査しなければ理解するのが困難である可能性のある出来事の諸側面を、一般的・抽象的・客観的・普遍的にひとまとめにして包摂し「理解可能」としてしまいう institution の言説の力であると考ええる。

実際の日々の生活において自他の身に起きていることをめぐる、思考の言葉(専門的知識)における「知り方」と、日常の言葉(日常的知識)における「知り方」の間には断絶がある。institution の過程における社会的な知識の産出の場面において、後者の「知り方」は前者の「知り方」の基盤となるが、後者は前者に包摂されうるものとして扱われ、通常は表に出てこない。日常の言葉において知られたことは思考の言葉に置き換えられ、そもそも二つの「知り方」の間に断絶があること自体が不可視にされる。スミスの議論が提起するのは、「テキスト的現実」の産出において不可欠でありながら「テキスト」からは排除されている人々のワークやワーク・ノレッジ—「テキスト」作成のワークやワーク・ノレッジを含む—を可視化し、通常は閉じられてしまう二つの「知り方」の断絶を開いて、両者の非対称性が生み出されるメカニズムを解明することが、既存の社会のあり方を再考するために必要とされる場合があるという論点だ。

人々の日々の生活における局所的で個別具体的なワークは、自らが直接見たり聞いたり経験したりしていることの範囲を超えた、別の場面で別の人々が知っていることや行なっていることに接続している可能性がある。スミスによれば、その痕跡は、人々が自分の日々の生活について語るありふれた日常のやり方の中に—少なくともそれらについて具体的に話す時には—表現されている可能

性がある。ある所与の場面においてある用語が意味を持つやり方は、人々が日々の生活の中で知っていることや行なっていることが、自らの経験の範囲を超えた別の場所で別の人々が知っていることや行なっていることに接続し、institutionの過程の社会的組織化に関わっていくやり方を示唆している可能性がある。そのようなワーク・ノレッジをいかにして発見していくかが、IEという社会学的探究を進めていく鍵となるのである。

4. 50年後の「名前のない問題」

4-1 二つの「診療記録」

日々遂行されるワークのルーティンを止め、そのやり方に疑義を挟み、立ち止まって再考を促すような言語使用実践の難しさは、そうした実践活動自体が当該ルーティン・ワークの遂行される社会的文脈に埋め込まれていることによる。世の中に広く浸透している「まっとうさ」に対して疑義を差し挟むことは、日常生活における「正常性」を揺るがしかねない「逸脱」行為であり、相互行為の正当な参加者としての資格を失う恐れもある⁽¹⁴⁾。小説『82年生まれ、キム・ジョン』においてもまた、当該社会において支配的な「女性」観に対する疑義が抑圧されるメカニズムが描かれている。主人公は、例えば家庭や学校や職場で、身近な他者と日々行う相互行為において広く自明視されているある種の「女性」のあり方に疑問や理不尽さを感じるが、それに真っ向から異議を申し立てることができない。ついに彼女に「異常な症状」が現れ、そのことに当惑した夫の勧めで精神科の診療を受けることになる。彼女は「鬱」と「不眠」の診断を受け、治療を継続している、という物語である。

前述したようにこの小説は、精神科の診療記録という形式で構成されている。物語は、2015年秋の最初の「診療記録」としての、次のような記述から始まる。

キム・ジョン氏、三十三歳。三年前に結婚し、昨年、女の子を出産した。三歳年上の夫チョン・デヒョン氏と娘のチョン・ジウォンちゃんとともに、ソウルのはずれにある大規模団地の二十四坪のマンションにチョンセで住んでいる。チョン・デヒョン氏はIT関連の中堅企業に勤めており、キム・ジョン氏も小さな広告代理店で働いていたが出産とともに退職した。デヒョン氏の帰宅時間は毎日夜の十二時ごろで、週末も、土日のどちらかは出社する。夫の実家は釜山だし、ジョン氏の両親も食堂を営んでいて忙しいので、ジョン氏は一人で子育てを担当している。ジウォンちゃんは一歳の誕生日を迎えたこの夏から、団地の一階にある家庭型の保育園に午前中だけ通っている。

キム・ジョン氏に初めて異常な症状が見られたのは九月八日のことである。…(チョ 2018:6-7: 訳注は省略している。)

この最初の「診療記録」は、妻の行動に当惑した夫がまず一人で精神科を訪れ、医師に妻の状態を説明して治療法を相談した際に話したことの記録とされている。それゆえこの「記録」は、夫の視点から、夫が直接関わっているシークエンスを中心に構成されている。冒頭の一段落目で家族構成や子育ての現状についての報告がなされた後、「キム・ジョン氏に初めて異常な症状が見られたのは九月八日のことである。」と、「病気」の徴候の最初の出現についての記述が続く。以後この「記録」においては彼女の「異常な症状」に焦点が合わせられ、「その後も変なことは少しずつ続

いた。…(チヨ 2018:11)」「秋夕の連休にデヒョン氏の実家へ行ったとき、事件は起きた。…(チヨ 2018:12)」「…デヒョン氏は怒っていなかった。それよりも困り果てて、混乱し、怖かったのだ。(チヨ 2018:17)」と、「症状」が「悪化」していく過程が夫の立ち位置から述べられていく。

2015年秋のこの最初の「診療記録」は、次のような段落で締めくくられる。

まずデヒョン氏が一人で私の精神科を訪れ、妻の状態を説明して治療法を相談した。ジヨン氏は症状を自覚していなかったが、眠れないし、辛そうなので、ともかくもカウンセリングを受けてみることを勧めた。ジヨン氏は、そうでなくとも最近気分が沈み、何ごとにも意欲が湧かず、育児鬱ではないかと思っていたと言い、私の提案に感謝した。(チヨ 2018:17)

夫の勧めで診療にやって来た主人公本人は自分の「症状」を自覚していなかったが、精神科医からカウンセリングを受けてみることを勧められる。すると彼女は「育児鬱ではないかと思っていた」と言い、医師の提案に感謝したと述べられる。医師による専門的な診断が下される以前に、「起こったこと」はすでに、夫によってだけでなく主人公によっても、「精神医療化された」形式で語られている⁽¹⁵⁾。institutionの過程で「テキスト的現実」を生み出していくイデオロギーや言説や知識や概念は、私たちが特定の時間と空間において個別具体的な他者と日々行っているおさまりの相互行為を理解するやり方の中にすでに紛れ込んでいる可能性が示唆される。

あるいは、冒頭の一段落目における、家族構成や子育ての現状についての「事実報告」においてすでに、後続する主人公の言動を「産後鬱」という「病気」と関連づけて読むことを準備するような詳細事項が選り出されていると言うこともできる。この最初の「診療記録」においては、主人公の言動は、一貫して、精神医学の枠組を使用しなければ論理的な接続を見出すことができない「病気の事例(case)として読まれよう、取捨選択され、組み立てられているのである。

しかしながらこれ以降、主人公の診療の記録は、精神医学における「テキスト」としてはおそらく逸脱したやり方で書かれていくのであり、それがこの小説の主要部分となる。2015年の最初の「記録」は33歳の主人公が3年前に結婚したことから始まるが、以降の「記録」は1982年4月1日に主人公が生まれたことから始まる。以降の「記録」には、患者である主人公自身が「自ら選んで精神科医の前に広げてみせた人生の場面場面(チヨ 2018:162)」が記述されていく。この「記録」には、語られた出来事の時代背景について、当時の韓国についてのニュース記事や統計資料などからの情報も併記されている。およそ30年間—主人公が生まれる前の親世代の経験を含めればそれ以上にわたる韓国の歴史に関わるこれらの情報は、記録を書いている精神科医があらかじめ知っていたというよりは、自ら調べて書き加えたということになるだろう。精神医学としての「事実報告」からは本来除外されるべき情報を、わざわざ時間と労力をかけて付け加えているということになる。

この小説において、主人公は「鬱」と「不眠」の診断を受け治療を継続しているのであり、結果としてこれらの「記録」は精神医学の機関における公式の文書としての「テキスト」からは「適切に」排除されたことが示唆されている。しかしながら同時に、カウンセリングを経て、この精神科医は当初の「自分の診断が性急だった」ことを悟る。それは「間違っていたという意味ではなく」「私がまるで考えも及ばなかった世界が存在するという意味である(チヨ 2018:162)」と述べられる。筆者は、この採用されなかった「記録」には、主人公の抱えたある種の「困難」について、仮に適切な精神医学的ケアが遂行されたとしても解決されえないかもしれない、別の種類の「問題」の存在が記述されていた可能性を示唆する。それは、社会学的言説の言葉で言えば、「社会問題」と言いうる

ようなことがらである。

この「記録」に併記されている韓国内のニュース記事や統計資料などからの情報—精神医学とは別の「テキスト的现实」—は、主人公が日々の生活の中で個別具体的な他者たちと行う局所的な相互行為において見たり聞いたり経験したりしてきたことを、それを越えた世界についての「客観化された知識」の例として扱うことを可能にする。世の中の状況をめぐる「客観的な」情報は、主人公の身に起こっていることが彼女だけの問題で完結しない可能性があること、主人公の身に起こっていることは読者の身に起こっていることと関係しているかもしれないこと、主人公と読者の間には共通の利害関心が見い出せるかもしれないこと、人々が日々の生活のルーティンとして行っていることや考えていることを一定のやり方で方向づける何らかの仕組が存在する可能性があることなどを、読者に示唆するだろう。

4-2 個人の経験における社会的なこと

その意味で、この「診療記録」があくまで「フィクション」として筆者によって創作されていることは、そこに書かれている内容においてというよりは、それを書くやり方において鮮明に現れてくると言えるかもしれない。この「記録」においては、精神医学の言説と別の言説において定式化され認識された対象としての、「社会問題」についてのニュース記事や統計資料などからの情報が併記されている。他方「論文」ではなく「小説」という形式が取られることで、主人公の経験における詳細事項は、「つまりこれは〇〇という社会問題なのだ」というようなやり方で、社会を論じる専門的言説の概念的実体に置き換えられることを免れている。あくまで特定の個人に起こった個別で具体的な出来事の記録として呈示されていることは、統計データや資料から示唆される世の中の仕組みについて、そのような仕組みが日々の生活において具体的にどのように作動しているのかという「テキスト的现实」とは別の理解を喚起する可能性もある。

改めてスミスの議論をふまえれば、この「診療記録」における「主人公の人生の場面場面」の記述は、主人公の言動や感情について最初の診断で下された「病気」という枠組を外し、彼女の一連の言動や感情を、精神医学の解釈スキーマの外で接続し直すようなやり方で進む。すなわち、最初の「記録」からは除外された、主人公本人が関わっているシークエンスが回復され、彼女の言動や感情が、元々の局所的行為の文脈における他者たちとの一連の相互行為の接続の筋道の中に埋め戻される。そのことをとおして、最初の「記録」の冒頭の一段落目の文章においては、「出産」「退職」「子育て」といった単語に包摂され、ひとまとめにされてしまった様々な詳細事項が、改めてつまびらかにされていく。「出産」や「退職」や「子育て」とは、主人公個人の単独の行為に関わることがらではなく、主人公の行為と夫や親や会社の同僚といった複数の他者たちの行為が一定のやり方で連係されることをとおして生み出される、社会的な出来事であることが浮き彫りにされるのである。

小説の主要部分で呈示されていくのは、2010年代に韓国で30代の「女性」として生きている人々がこれまでの人生において、家庭で、学校で、職場で実際に日々生活しながら学んできたこと、身につけてきたこと、知っていることに関わることがらである。日々の生活において他者から明に暗にある種の「女性」として呼びかけられ、それに対して様々なやり方で応答—そのような「女性」観に、従おうとすることも、抗おうとすることも含む—しながら生きている人々が、家庭で、学校で、職場で実際に日々生活しながらどのようなことを学んできたのか、身につけてきたのか、知ってきたのか明らかにされていく。ここで可視化される「女性」観は、日々の生活のルーティンを実際に動かしていく拠り所として、場面横断的に人々によって当てにされ使用される一つの社会的

な「ものの見方」—スミスの言うイデオロギー・コード—である。

このようなワーク・ノレッジは、実際にそれを使って日々生きている人々にとっては、通常は、立ち止まって考えられることもなく、言語化されることもなく、自明視されていることがらである。日々の生活のルーティン・ワークを遂行するという視点からは、具体的な他者たちと行う局所的な相互行為をとおして見たり聞いたり経験したりしたことにおいて、自分たちが何を「あたりまえ」にしているのかは不問に付され、不透明なままである。このことが改めて可視化されるのは—この小説の主人公が遭遇したように—これまで自明視されてきたものの見方を拠り所にして自他の行為を理解したり、日々のルーティンを遂行することに何らかの「困難」が生じた時であるだろう。

特定の時間における特定の他者たちとの、家庭での、学校での、職場での日々のやりとりにおいて、この小説の主人公は「なぜそうなるのか」「なぜ他のあり方ではいけないのか」という疑問を抱く。前述したように、日々遂行されるワークのルーティンを止め、そのやり方に疑義を挟み、立ち止まって再考を促すような言語使用実践の難しさは、そうした実践活動それ自体が当該ルーティン・ワークの遂行される社会的文脈に埋め込まれていることにある。進行中のやりとりは、主人公が少し考えている間にも過ぎ去ってしまうため、そのような疑問は明示的に口に出されないことも多い。あるいは口に出したとしても、「そういうものだから」「気にするほどのことではない」「なんでもないこと」「考えること自体が余計なこと」として扱われ、素通りされていく。日々の生活における具体的な他者たちとの目下進行中の相互行為場面において、いちいち立ち止まって考えたり、ましてや相手に直接「それはどうして？」などと聞くことは、それ自体が「めんどろ」だとはばかれてしまう。もちろん、相手が主人公に対して「あなたはなぜそう思ったのか」などと尋ねることはないし、「何が起こったのかをもっと詳しく聞かせてほしい」と求めることもない。

主人公が遭遇する「困難」は、当該社会に生きる女性なら誰でも同じように経験する、というものではない。例えば、小説中にも描かれているように、人並み以上の「勇気」や「能力」や「努力」によって、既存の「女性」観に抗い、自分自身で別の道を切り開く場合がないわけではない。しかしそれができなければ、この主人公がそうであるように、直接顔を合わせて社会生活を共にする具体的な他者たちとの日々のルーティン・ワークに齟齬をきたすほど、そのことについて考えたり、相手を説得したりしようとはしない可能性がある。「困難」自体が存在しなかったことにされるのである。

世の中に広く自明視されているものの見方が一定の力を持つのは、それに対する疑義がないことによるというよりは、そもそもそれを改めて言語化する機会それ自体が少ないことによる可能性がある。このような「ものの見方」は、日常のありふれた知識の一部だが、家庭や、学校や、職場における特定の他者たちとの個別具体的な相互行為場面に内在する論理にとどまらない。むしろそれは場面超越的にそれらの相互行為を外側から規定していく論理でもあり、それに対する疑念を「そういうものだから」と抑圧するような力を持つ認識の枠型として作動していると考えられるのである⁽¹⁶⁾。

5. おわりに

この小説の記述の形式は、スミスの社会学的探究における「エスノグラフィー」の形式と接点を持つ。スミスのIEは、「テキストの現実」からではなく、そのような「現実」がもともと依拠していたはずの、人々が自らの経験を思い出しながら感じたことや思ったことを含めて語った「起こった

こと」の記述にアクセスしようとする。自分の身に「起こったこと」をめぐる人々の経験は、何らかのやり方で語られなければ可視化されない。スミスがinstitutionの過程における専門家による「事実報告」作成のワークに着目するのは、ある種の強制力を持って、人々が自分の身に起こったことを順を追って話すことを求められる場面であるからだろう。そのような機会でもなければ、表に出ることのなかった様々な「起こったこと」がある。その上で、IEにおいては、institutionの過程にとって不可欠だが「テキスト」には書かれていないあらゆるワークに依拠して、この過程で何が起きているかを「知り直す」ような社会学的知識を生み出すことが目指されるのである。

このようなスミスの社会学が示唆するのは、人々に、自分の身に起こっていることが自分だけの問題で完結しないこと、自分の身に起こっていることが他者の身に起こっていることと関係していること、自分と他者の間には共通の利害関心が見い出せること、自分の行っていることや考えていることを一定のやり方で方向づける何らかの仕組があることなどについて、「テキストの現実」とは別の知り方を呈示する社会学的探究の可能性である。

注

- (1) 上谷(2021b)を参照。
- (2) スミスのinstitutional ethnographyにおけるinstitution(s)という概念については、後述する。前稿上谷(2021b)も参照。
- (3) 本稿におけるpracticesの訳語については前稿の注3を参照。
- (4) case history: 医学だけでなく、case studies(case workを含む)をするための基礎資料(家族歴/集団歴)である。
- (5) 匿名性を確かにするためにスミスは、名前と日付と事実の詳細のいくつかの変更を行なっている。
- (6) 「プライマリー・ナラティブ」とは、人々が実際の経験をもとにそれを回想しながら作り出した記述(account)である。institutionの過程との接点で生み出されるが、「テキスト」とは別のやり方で作り出される記述である。「イデオロギー的ナラティブ」とは、プライマリー・ナラティブを、専門家の言説によって組み立て直し、包摂し、置き換えるように作り出された記述である。この点については上谷(2021b)を参照。
- (7) 人々が自身の経験に基づいて語ることは、そのままでは、institutionの過程を動かさうる「現実」たりえない。人々が語ったことは、それぞれの専門的言説における「知識の対象」として弁別的なやり方で定式化し認識できるような形式で記録される必要がある。例えば医療機関において「診断」や「治療」や「薬の処方」を行うための「テキスト」は、医学的に名前のつく「病気」の事例の記述になっている必要がある。この意味でこの「記録」は、人々が自身の経験に基づいて語ったことを単純に表象しているわけではない。むしろそれは、人々の経験を、institutionalな言説の枠組み、概念、カテゴリーの例や表現として包摂する手続きによって組み立てたものとして捉えられるのである。日本の医療機関における「カルテ(診療録)」も、作成することが法律上義務づけられているのみならず、実臨床、保険請求、医学教育など様々なinstitutionの場面を横断して使用されるという想定のもとに、記載されるべき項目が定式化されている。
- (8) スミスは「言説(discourse)」を、「知識の対象を弁別的なやり方で定式化し認識する、慣習的に規制された言語を使用する実践活動」と定義する。この点については上谷(2021b)も参照。

- (9) 報告、記述の意味を持つ **account** は、第一義的には「明細書」のことであり、「**ac-**(〜に) + **count** (計算する) = 〜に(数量などを)計算している」という語源を持つ。さらに、**count** とは「数える」「〜を勘定に入れる、〜を考慮する、〜を一つとみなす」という意味を持つ。このことをふまえれば、「**factual account**」にはそもそも、「何を事実の記述として勘定に入れるのか」という取捨選択の問題が内包されていると考えられる。
- (10) この点については、**Smith** (1999:157-171)、上谷(2018a)も参照。
- (11) **ISA** (**International Sociological Association**) には、テーマグループ06 **Institutional Ethnography** のセッションがある。スミスは、アメリカ社会学会(**ASA**)から「フェミニスト社会学のためのジェシー・バーナー賞」(1993)や「**ASA**の顕著な学識の職歴賞」(1999)を、そしてカナダ社会学会から「優れた功績賞」(1990)や「ジョン・ポーター賞」(1990)を受賞し、「社会学の変換」に貢献した社会学者として認識されている。特に**IE**は、20世紀、21世紀の社会学における「現代の古典」と見なされるべきものだと論じられるほど、理論的・方法的業績として高く評価されている。
- (12) スミスにおける「社会関係(**social relations**)」という用語は、**social capital**の日本語訳としての「社会関係資本」における「社会関係」とは別の文脈で使われている。ここで**social relations**とは、特定の局所的場面において人々が行なっていることを、他者たちが別の場所で別の時間で行なっている(あるいは行なっていた)こととの連鎖において捉えようとするものの見方のことである。この概念によってスミスは、何かを「知る」ということを、個人の頭の中で起こっていることがらとしてではなく、先行するものが後続するものを意図し、後続するものが先行するものの社会的特徴を実現するあるいは達成するという、時間的連鎖に埋め込まれた諸行為の連鎖の中で起こっていることがらとして捉え直そうとするのである。その上で、この行為の連鎖のされ方に注意を払いながら、日常の言葉において知られたことが思考の言葉に置き換えられる際の、両者の「知り方」の非対称性を明らかにすることが目指されるのである。
- (13) この点については、上谷(2019)も参照。
- (14) 50年前の北米の女性運動は、北米において長らく「標準」とみなされてきた白人・中産階級・法律婚・異性愛カップルに支配的な生活様式に対して、その「恩恵」を受けていたはずの白人・中産階級の異性愛女性自身が異議を唱えるほど、既存の社会のあり方に対する大きな問い直しを含んでいた。それは単独で生じたわけではなく、ベトナム戦争反戦運動、公民権運動など、欧米先進国において近代社会のあり方それ自体への異議申し立てが大規模に生じた時代背景があった。そのような時代背景が、これまで顧みられてこなかったワーク・ノレッジに光をあて、これに依拠して既存の**institution**の過程の作動の仕方を点検する試みを後押ししたと考えることもできるだろう。
- (15) このことには、精神医療へのアクセスのハードルが低くなったということも関係しているだろう。韓国における精神保険医療福祉のあり方の変化については、呉(2018)を参照。スミスによれば、人々にとって精神医学の諸機関がどのように利用可能なかは、機関が何を提供するか産物であり、機関が扱えるコミュニティの中の問題の種類産物であり、患者を紹介する社会的つながり、健康保険、福祉や警察の実務、口コミ(**word-of-mouth**)、などによって機関と患者の中に作られる一致の産物である(**Smith** 1990a:127)。
- (16) ある種の「女性」のあり方が自明視されているということには、例えばこの小説でも描かれているように、職場という公的領域において「休日出勤」や「残業」や深夜まで続く取引先との「接待」がなぜルーティンとしての職務に組み込まれ続けているのかということからも含まれ

る。このような公的領域でのワーク(有償労働)のあり方と、家庭という私的領域でのワーク(無償労働)のあり方は、相互に規定し合っているのである。

文献

- Judi Chamberlain(1975) *Struggling to be Born*. in Dorothy E. Smith and Sara J. David(eds.) *Women Look at Psychiatry*. Vancouver: Press Gang.pp.53-57.
- L. C. Kolb(1977) *Modern Clinical Psychiatry*. Philadelphia: W.B.Saunders.
- Diane Harpwood(1982) *Tea and Tranquilizers: the Dairy of a Happy Housewife*. London: Virago.
- チョ・ナムジュ(2018)『82年生まれ、キム・ジヨン』筑摩書房
- チョ・ナムジュ×川上未映子×斎藤真理子×すんみ(2019)「『82年生まれ、キム・ジヨン』、『ヒョンナムオッパへ——韓国フェミニズム小説集』刊行・著者来日記念トークイベント」(2021年3月17日取得 <http://www.webchikuma.jp/articles/-/1680>)
- チョ・ナムジュ×斎藤真理子(2020)「特別対談 未来のキム・ジヨンのために」(2021年3月17日取得 <http://www.webchikuma.jp/articles/-/1967>)
- 毎日新聞(2020)「女性のつらさ社会に問う」2020年10月24日夕刊
- 呉 恩恵(2018)「韓国の精神保健福祉:歴史から展望へ」ライフデザイン学紀要 13, pp.49-76.
- Dorothy E. Smith(1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. University of Toronto Press.
- — —(1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*. Northeastern University Press.
- — —(1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*. Routledge.
- — —(1994) A Berkeley Education. in Meadow-Orlans, Kathryn p. & Ruth A. Wallace(eds.) *Gender and the Academic Experience : Berkeley Women Sociologists*. Lincoln : University of Nebraska Press.pp.45-56.
- — —(1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.
- — —(2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Altamira Press.
- 好書好日(2019)「『82年生まれ、キム・ジヨン』はなぜ支持される? 翻訳者・斎藤真理子さんが徹底解説」(2021年3月17日閲覧 <https://book.asahi.com/article/12109416>)
- 上谷香陽(2010a)「ドロシー・スミスにおける社会学的記述の問題—institutional ethnographyという視点」『ソシオロジスト』12(1)pp.73-96. 武蔵社会学会。
- — —(2010b)「対話としての『経験』—ドロシー・スミスの視点」『武蔵大学総合研究所紀要』no.19, pp.117-133. 武蔵大学総合研究所。
- — —(2017a)「日常生活世界から社会を知る方法—ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』27(2)、pp.1-16. 文教大学国際学部。
- — —(2017b)「日常生活世界の記述可能性—ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点」『文教大学国際学部紀要』28(1)、pp.1-22. 文教大学国際学部。
- — —(2018a)「テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード—ドロシー・スミスのinstitutional ethnographyをめぐって」『文教大学国際学部紀要』28(2)、pp.1-20. 文教大学国際学部。
- — —(2018b)「社会を知るもう一つのやり方—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』29(1)pp.1-18. 文教大学国際学部。
- — —(2019)「ドロシー・スミス Institutional Ethnographyにおけるワークおよびワーク・ノレッジ概念の検討」『文教大学国際学部紀要』30(1)、pp.1-16. 文教大学国際学部。

- — —(2020a)「研究ノート：経験を語る二つの様式の断絶—知識の社会的組織化をめぐるドロシー・スミスの着眼点」『文教大学国際学部紀要』30(2)、pp.55-68. 文教大学国際学部。
- — —(2020b)「研究ノート：「社会」という言葉を使って Society について考えるということ—柳父章の翻訳日本語論を手がかりに」『湘南フォーラム』24、pp.109-122. 文教大学湘南総合研究所。
- — —(2020c)「ドロシー・スミスの社会学における institutional discourse について」『文教大学国際学部紀要』31(1)、pp.1-14. 文教大学国際学部。
- — —(2021a)「研究ノート 社会学記述における二重の関係について—ドロシー・スミスに依拠して」『文教大学国際学部紀要』31(2)、pp.89-104. 文教大学国際学部。
- — —(2021b)「『女性の経験』と知識の社会的組織化—ドロシー・スミスの IE に依拠した『82 年生まれ、キム・ジョン』の読解(1)—」『文教大学国際学部紀要』32(1)、pp.1-19. 文教大学国際学部。

